

『はにふの物語』について

伊藤千世

されており、これを基に確認させていただく。

はにふの物語 別名大納言物語

一 刈谷図書館蔵・明応6年奥書本の転写本 大一冊

《室町時代物語大成十・未刊中世小説三》

尊経閣文庫蔵・同右奥書本の延宝7年写本 特大一

冊《未刊中世小説解題》

二 国立国会図書館蔵・「叢書料本」第二八所収写本

(内題「大納言物語」) 半一冊

実践女子大学図書館蔵・写本 (内題「大納言物語」)

大一冊の内(「天稚彦物語」と合)《中世文学二》

宮内庁書陵部蔵・文化10年写本 (内題「大納言物語」)

半一冊

このうち、『国書総目録』³によれば、書陵部本は葦舎主人写である。この他に、『研究紀要人文科学』²では阿

応永年間頃から明応六年(一四九七)年頃までに成立したと考えられる『はにふの物語』は、大納言の姫君と南朝方貴族(近衛殿)の若君との恋愛及び若君の出家遁世を描いた物語であり、構想上は『ふせや物語』・『転寝草紙』・『秋の夜の長物語』や如無僧都説話との類似点が指摘されている。また、この作品は、右の三物語と異なり、艶書を多く交わしていることから、艶書小説としても位置付けられている。¹なお、本文には九十首に及ぶ引歌が注記されていて、注目に値する。

さて、『はにふの物語』の伝本については、松本隆信氏によって、『室町時代物語類現存本簡明目録』²に分類

波国文庫蔵本『大納言物語』の影写本を翻刻しており、高橋貞一氏によるとこの影写本は、江戸中期以前の写とされている。なお、第二系統本は、丁度、第一系統本の文（懸想人達と姫君の十二回の往来、石山寺參詣後の姫君と若君の二回の往来、侍従が若君に寄越した文）のみを、引歌の解説とともに、抜粋したものとなっている。

本稿では、『はにふの物語』の引歌について検討し、その結果がどのような問題提起につながるか、述べてみたい。そこで、第一系統本の本文の引用に際しては、刈谷図書館蔵本（以下刈谷本とする）を底本とする『室町時代物語大成⁽⁵⁾』の所収本による。（以下引用本文の頁数は『室町時代物語大成』本の頁数である。）また、尊経閣文庫蔵本（以下尊経閣本とする）で、これを補うことにする。第二系統本の本文を引用するおりに、国立国会図書館蔵本『大納言物語』⁽⁷⁾（以下国会本とする）を用いることにする。

二

まず、『はにふの物語』の刈谷本と尊経閣本との関係についてふれておく。

刈谷本は、本文四十一丁で、本文に次いで、

明応六年^{丁巳}卯月十八日写之とあり、つづいて、

右はにふ物語一卷原本四十一葉相伝云後土御門院勾当内侍書也朱点并書人アリ悉同筆ト見ユ 吉原愛秋所蔵

とある。これに対して尊経閣本は、本文四十一丁で、本文に次いで、

明応六年^{丁巳}卯月十八日 写之とあり、左下隅に、

ハニフノモノカタリ

と記している。そして、四十一丁裏に、冒頭六行ほどの臨模を貼付てある。この臨模は、本文の冒頭と、漢字・仮名・行づめを含めて同一であるため、右筆が、テキストを全体的に丁寧⁽⁸⁾に記していることがわかる。さらに、次の丁に、

右丹生物語一卷出於尾州愛智郡伝称^(マ)土御門院内侍之所筆也雖未詳之紙墨之旧非旦夕所可能擬矣是故命侍史遂以謄録焉且摹搨卷端数行而粘之後以備他日之觀 閱云

延宝⁽⁹⁾己未二月下旬

とあり、「国義之章・敬義堂印」の印記より、松雲公前田綱紀の奥書と知られる。この点から、尊経閣本の土御

門院勾当内侍は、時代から見ても、後土御門院勾当内侍であった四辻春子と考えられる。この南家高倉家の出で、四辻季保の養女となった春子は、生年が未詳であるけれども永正元年（一五〇四）年に亡くなっており、文明期の宮中歌合に出席し、『新撰菟玖波集』にも入集している。故に、刈谷本の原本が四十一丁であったことや、尊經閣本が四十一丁でありかつ松雲公が右筆に忠実に写されたという点から、両本は非常に近い存在の本であることがわかる。

ただし、本文の、

かねては、さ様事あらは、それをたよりに、あま出家にもならんとこそ、思ひつるに、いまは、ひきかへて、ひとたひ、うつ、のおもかけを、見ることもやと、いきてかひなき、いのちも身も、いまさらをし、く、〔てと、の給ひて、しのひかねたる御袖のけしき、見まひらせて、いか、せんとそ、思ひ〕あはれける〔五八五―五八六頁〕
という個所で、刈谷本は、傍線部の文章（尊經閣本で示すと二十七丁表の五行目の十六字目から六行目の二十字目までの文章）が、二十六丁表の終わりから裏に続き脱落している。

また、刈谷本では、姫君の石山寺参詣の道行の場面で

本文に、

1 関のいはかと、ふみならし、² かけみゆる清水に、
心をすませ給ひて〔五七二頁〕
とあり、傍線部の1の付近に、

あふさかや、せきのいはかと、ふみならし、みねた
ちいつる、きりはらのこま

と、『拾遺和歌集』⁸卷第三秋一六九番歌の藤原高遠の歌が、傍線部2の付近には、

あふさかの、せきのしみつに、かけ見えて、いまや
ひくらん、もちつきのこま

と、『拾遺和歌集』の一七〇番歌の紀貫之の歌が注記されている。しかし、尊經閣本では、もともと刈谷本のよりに注記されるはずであった引歌が、

あふさかやせのいわかとふみならしいまやひくらん
もちつきのこま

と、『拾遺和歌集』の二首の歌を合わせたような歌に注記され、引歌の合計数において刈谷本より一首少ない。この本文・引歌の相違は、両本とも不注意による写し落としによるものである。

以上の点から、尊經閣本は刈谷本を書写したものであるなく、用語の相違は多少あるものの、両本は祖本（後土御門院勾当内侍筆本）が同じであったと考えられる。そ

して、この祖本は、前田綱紀や吉原愛秋なる人物が閲覽した頃まで存在していたらしい。

三

さて、市古貞次氏は、『はにふの物語』の本文の引歌の注記について、『未刊中世小説』^③の解説で、

また手紙の文中の引歌を上部に註記してあるが、これらは恐らく書写者の手に成るといふよりは原作に存したものであるかと想像されるのであつて、彼此あはせて和歌の知識を与へ、書翰の文例を示すといふ、啓蒙性を否定できないであらう。

と述べられている。しかし、この引歌の注記については、いささか疑問を感じる点があるので、検討してみたい。はじめに、本文に注記された引歌の出典については、市古貞次氏が同書で指摘されているけれども、少し考えてみたい。

まず、第三番目の四月の初旬頃、懸想人が姫君に寄越した艶書には、

うはのそらにあこかれ候ぬるは、たれをたれとか白雲の、〔五六四頁〕

とあり、その上の付近に注記された『千載和歌集』巻第

十一恋歌一の六四七番歌の、

一め見し、人はたれとも、しらくもの、うはのそらなる、こひもするかな

を、藤原実定の歌とされているけれども、『新日本古典文学大系千載和歌集』^④によれば、藤原実能である。

次に、石山寺参詣後初の若君の艶書に対する姫君の返書には、

いはしろのまつと、ことよせ候ても、なほむすほ、れ候ぬる心の中、おし、めたる事にて候へは、〔九五頁〕

とあり、その上の付近に注記された、

おもへとも、えそいはしろの、むすひまつ、むすほ、れたる、わかこ、ろかな

の歌の出典を、上句の相似から、

『新拾遺和歌集』巻第十二恋歌二

題しらず

相月法師

思へどもえぞいはしろの結松うちとけぬべき心なら

ねば（一〇三九）

と指摘されているが、下句は

『金葉和歌集』二度本巻第七恋部上

題不知

源顕国朝臣

かくとだにまだいはしろのむすび松むすほはれたる

わがころかな(三七八)

によるのであろう。それに、この歌は『金葉和歌集』の三奏本(三九六番歌)の方では、「初恋のころを」という詞書がある。姫君にとつて、若君は初恋の人であるので、その点からもイメージがあう。

また、本文に注記されている引歌の、

あふさかの、せきをは鳥の、ねにこえて、あさ露わくる、あはつの、はら

は、『新拾遺和歌集』巻第九羈旅歌

中園入道前太政大臣家にて、朝旅行といふこと
を 頓阿法師

相坂の鳥の音遠く成りにけり朝露わくる粟津の原

(七七七)

と、

『続現葉和歌集』巻第七羈旅歌

題しらず

宗寛法師

あふさかの関をばとりのねにこえてくるるやどとふ
をののしのはら(五五六)

との、二首の下句と上句をつなぎあわせたような歌と
なっている。しかし、注記されている個所の本文が、

夜もあけすきければ、あさ露わくる、あはつ野の、
あはれはかなき、身のゆくへかなと、〔五七二頁〕

五七三頁

と記されていることから、市古貞次氏が指摘されたとお
り『新拾遺和歌集』の頓阿の歌が、引歌と考えられる。

そして、この歌は、頓阿の歌集『草庵和歌集』の一二六
七番にも入集しており、歌の本文は『新拾遺和歌集』に
同じである。

なお、本文に、

されは、心にこゝろゆるすな、といふ歌を、ある説
経者のおほせ候しを、いまさら、おもひしられにけ
り〔五八三頁〕

とあり、傍線部付近に注記されている

心こそ、こゝろまよはず、こゝろなれ、こゝろに心、
こゝろゆるすな

の歌は、『はにふの物語』より時代は下るものの、『百物
語』巻之上の「九 楽天が三儀の事」に、

九 ある人白楽天の三儀とて語りしハ

一日計在二鶏鳴一 鶏鳴不レ起日課空

一月計在二朔日一 朔日不レ立一月空

一年計在二陽春一 陽春不レ耕秋実空

といへる語、まことにたゞ人ハ心に油断おこるによ
り、よろづにくゆることもわざハひもおこるとかや。

古き哥に、

こ、ろこそこ、ろまよハすこ、ろなれ
心にこ、ろこ、ろゆるすな

といったように記されている。故におそらく、当時の人々
にとっては親しみ深い歌であったのであろう。

四

では、このように注記されている引歌は、本文と適合
しているのだろうか。そのことについて、考察していく
ことにする。

まず、第四番目の「うはのそらなる、風のたよりに」
と文を寄越した懸想人と姫君の往来（Aが懸想人の文・
Bが姫君の文）は、

Aさもこそは、うつ、に、つらき御事なりとも、わ
ひつ、さら／＼めもあはぬ、ねやのいたまを、も
る月を、なかもあかし候ても、くもらはくもれと
のみ、かこつはかりにてこそ候へ
さても、此玉つさの、もしの返事

Bおもひねならぬ、たまくらなれば、何かは、ゆめ
にもあふとは、御らんし候へき、こひしき人の恋
しきも、た、なほさりの、御心つくしにやと、お
ほえてこそ候へ〔五六五頁〕

とあり、そして、この上には、

①ゆめにたに、あふとは見えよ、さもこそは、うつ、
につらき、心也とも

②なかわれは、こひしきひとの、こひしきに、くもら
はくもれ、秋のよのつき

③こひすてふ、もしのせきもり、いくたひか、われか
きつらむ、心つくしに

と、引歌が注記されている。この引歌③が、注記されて
いる理由が理解しにくい。なぜなら、姫君が結婚を拒否
するために歌の出典を解き明かしていく場面であるの
に、姫君の文の個所には、この歌の言葉が記されている
ものの、贈り主の文の個所には、これに該当する言葉が
見当たらないからである。しかし、この個所を、国会本『大
納言物語』で照らしあわせてみると（Aが懸想人の文・
Bが姫君の文）、

Aさもこそはうつ、につらき御ことなりともわひつ、
もさらにめもあはれねやのいたまをもる月をなかも
あかしてもくもらはくもれとかこつはかりにてこそ
候へ

なかむれは恋しき人のこひしきにくもらはくもれ
秋の夜の月

さてもこの玉つさのもしのせきもりはかりを心ある

さまなる御返事を待みまいらせたく候へ

恋すてふもしの関もりいくたひかわかかきつらむ
心つくしに

かへし

B おもひねならぬ手枕なにかは夢にもあふとも御覽し
候へきこひしき人の恋しきもた、なをさりの御こ、

ろつくしにやとおほえて候

とあり、傍線部から、この歌が注記された理由が理解することができよう。さらに、もともと第一系統本には、「玉つさのもしの」から「返事」までの個所に、国会本のように、

せきもりはかりを心あるさまなる御返事を待みまい
らせたたく候へ

といった類の文章があつたのではと考えられる。そして、この第一系統本の刈谷本・尊経閣本の両本ともこの部分が脱落していることから、両本の祖本においても、この脱落があつたと想像される。故に、この祖本『はにふの物語』はオリジナル本ではないようである。

さらに、第十番目の「山した庵の、いやしきすみかより」と文を寄越した懸想人と姫君の往来（Aが懸想人の文・Bが姫君の文）は、

A とつなのはしに、おもひわたり候へは、¹あふと²見

るに、¹なくさむへき、²ゆめのうきはし、³とたえぬる
事にて候へは、とこ中にのみ、おきる候ても、²誰
をかこつへき、ことのはも、なくてこそ候へ、いま
は神のあはれみをたにたのみかたくて

いまは身の、うさかの神を、たのみても、あはす
はいのち、霜ときえなむ

とよみ侍ける

御返事

B たえすおもひわたらせ給ひぬる、¹ゆめのうきはしは、
あたなる御心の、すゑなれば、たのみかたく、枕よ
りせめくる、恋の御心のをりにてや

いかに身の、うさかの神を、ちかひても、しもと
のかすは、あらしとそおもふ

とそ、あそはしてありける〔五七〇頁〕
とあり、この上記に、

① みちのくの、とつなのはしに、くるつなの、たえす
もひとを、恋ひわたるかな

② よしさらは、あふとみつるに、なくさまん、さむる
うつ、も、ゆめならぬかは

③ まくらより、あとよりこひの、せめくれは、とこ中
にこそ、おきあられけれ

④ こひそめし、心をたれに、かたらまし、あはぬはひ

との、うきになせとも

⑤ いかにせむ、うさかのみやに、身はずとも、きみか
しもとの、かすならぬ身を

の五首の歌が注記されている。ここで、本文の二重傍線部より、

『新古今和歌集』卷第一春歌上

守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲
のそら(三八)

を、引歌として挙げられるように思われる。また、ここに注記されている引歌②や、④の歌は、本文の波線部1・2の言葉と和歌の言葉が似通っているために、そのまま引歌と思ひ込み記してしまつたと思われる。この個所も、文の贈り主の歌の典故を姫君が解き明かしていく場面であり、姫君の文には、歌を解き明かしている言葉が必要である。けれども、それに対応する言葉が見当らない。かりにこの個所に作者が引歌を盛り込んだ意識があるなら、姫君は此の文の贈り主と結婚しなくてはならないが、物語はそのように展開していない。なお、この個所を国会本『大納言物語』で照らしあわせてみると、引歌②は記されているが、④の歌は記されていない。このような

状況ではあるが、この引歌二首とも、やはり疑が残されるように思われる。故に、注記された引歌すべてが、本文と適合しているとは考えられない。

ところで、ここまで補つてみてきた国会本は、本文の字と同じ大きさの字で引歌が書かれているけれども、引歌数において、同場面における第一系統本に注記された引歌数と異なる。これを表にすると、

		第一系統 本引歌数	国会本 引歌数
物語前半の姫君と懸想人の艶書	45		32 (5)
侍従が若君にあてた文	2		2 (1)
物語後半の姫君と若君の艶書	14		11

註 (一)をつけた数は、引歌を解説するつもりが手紙文に結び付いてしまった(二首)らしいものや、歌が二句目及び三句目まで中途しているものも総数に含んだことを示す。

となる。この相違は、引歌の加筆を意味することができ
るのであろう。

以上の点から、『大納言物語』は、単に『はにふの物語』の往来部分を抜き出したものではなく、原本『はにふの物語』を、考える上で大切な要素をもっていると考えられる。

五

次に、先に述べた以外にも、引歌が内在していると思われるので、ここで幾例かあげてみたい。

まず、本文の地の文の、

ゑにかける、楊貴妃のかたちは、いみしく、きこえしといへとも、いとにほひを、かきあらはせることなし

太液の芙蓉も、けにかよひたるかと、あやまたれ、をみなへしの、風になひきたるより、なよひ、撫子の露にぬれたるよりも、猶らうたみ、なつかしき御すかた、花鳥の、いろにもねにも、よそふへきかた、なしといへは〔五六一頁〕

は、真下美弥子氏が指摘されたように、『源氏物語』の桐壺の巻の、

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければ、いとにほひすくなし。太液の芙蓉、未央の柳も、げに、かよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。〔二二二頁〕

を基としているようである。ただし、傍線部には、周知のように、

『後撰和歌集』卷第四夏

返し

藤原雅正

はな鳥の色をもねをもいたづらに物うかる身はずぐすのみなり〔二二二〕

が、引歌として存在している。

そして、第六番目の往来で、若君が詠んだ

よそののみ、さくのしらつゆ、おきもせず、ねもせて人を、おもふはかなさ〔五六六頁〕

の歌は、

『古今和歌集』卷第十一恋歌一

題しらず

素性法師

おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし〔四七〇〕

と、

『古今和歌集』卷第十三恋歌三

やよひのついたちよりしのびに人にものらいひてのちに、雨のそほふりけるによみてつかはしける
在原業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とながめくらしつ〔六一六〕『伊勢物語』第二段 男

(三)

の、二首を合わせて、若君が詠んだ歌にしているように思われる。また、本文でも、

此うたの心は、いせ物語にや侍るらん、時は弥生の、
ついでに、雨そほふるにや、ありけん、春のものとして、
ななめくらしつと、いへる心をと、まことに、
ゆうなる心にて侍るへし〔五六六頁〕

と、『伊勢物語』を念頭において詠まれたことが記されているので、この傍線箇所には、『伊勢物語』の歌が注記されていても良いはずである。ここまでは、いづれも、物語の場面の抽出というべきであろうか。

また、第八番目の懸想人と姫君の往来の始まりは、
嗟峨の方よりとて、あるゆふくれに、女郎花に、つ
けたるふみを、もちて、まゐり侍りけり、うは書、
うしろめたなど、か、れたり〔五六七頁〕五六八
頁〕

となつており、傍線部の言葉から、

『古今和歌集』巻第四秋歌上

ものへまかりけるに、人の家にをみなへしうゑ
たりけるを見てよめる

兼覽王

をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやど
にひとりたてれば〔二三七〕

を、引歌として挙げる事ができるだろう。そして、右の『古今和歌集』の歌と「女郎花」の語を共有して並べて配列された

寛平御時、蔵人所のをのこどもさがのに花見む
とてまかりたりける時、かへるとてみな歌よみ
けるついでによめる

平さだぶん

花にあかでなにかへるらむをみなへしおほかるのべ
にねなましものを〔二三八〕

の歌は、この艶書には直接関係しないが、詞書に「さがの」という言葉が記されていることから、懸想人の文に「嗟峨の方より」と記したのであるうか。また、第一系統本には記されていないけれども、国会本『大納言物語』のこの「嗟峨の方より」の文に対する姫君の返書には、懸想人の上書に対応して、

うはかきにあなことくしなと有
と記されている。これは、

『古今和歌集』⁽¹⁶⁾巻第十九雑体

たいしらす

僧正遍照

あきの、になまめきたてるをみなへしあなことく
しはなもひと、き〔一〇一六〕

の歌が、引かれてるように思われる。この場合、国会本が、この一文を独自に付け加えたものであるとは考え

られない。もし、独自に付け加えた一文であるなら、ここに、先の歌が解説されていてよいはずである。したがって、国会本がテキストとして使用した本に、この一文が、引歌注記もしくは引歌解説なく記されていたと思われる。

さらに、

*「瀬田の唐橋、駒もと、ろにと、うちすこし給ひてそ、(五七三頁)」——ひつぎものたえずそなふるあ

づまぢのせたのながはし音もとどろに〔兼盛集〕

一〇五、『万代和歌集』三八一六や、『風雅和歌集』

二二〇二では第一句を「みつぎもの」として入集)

*「ちかの塩竈、かひなくてと、のたまひて、(五八二頁)」——おもひかねころはそらにみちのくのち

かのしほがまちかきかひなし〔艶詞〕一八、『隆房

集』二一、延慶本『平家物語』一一八)

*「さしも、いろに出しとこそ、思ひつるに、我心の

うちの見えければにや、かやうに侍従、申ぬること

よと、とふにつらさの、まさる心ちし給ひて、た、

はつかしとはかり、おほしめしける(五八四頁)」

——しのぶれど色にいでにけりわが恋は物や思ふと

人のとふまで〔拾遺和歌集〕卷第十一恋一・六二

二・平兼盛)

*「あまは、ゆめにも、しりまゐらせ候はて、た、よそのみと、思ひまゐらせけることよ、たかまの山の、雲のまよひの、はかなさよ(五八五頁)」——よそののみ見てややみなんかづらきやたかまの山の嶺のしら雲〔新古今和歌集〕卷第十一恋歌一・九九〇・読人しらず)

*「おもひきや、せたの長はし、なからへて、またあふみちに、かへるへしとは(五九〇頁)」——わするなよせたのながはしなからへて猶世中にすみもわたらば〔続後撰和歌集〕卷第十四恋歌四・八九五・橋俊綱朝臣)

*「わか君は、文御覧して、つれなきいのち、なからへても、いまこそ、かひある心ちして、猶をしまる、いのちにてと、の玉ひて(五九六頁)」——ながらへばさても逢ふ夜のたのみとて猶をしまる我が命かな〔新後撰和歌集〕卷第十二恋歌二・八五七・法皇御製(亀山院)

といった引歌の内在の可能性が、あるように思われる。

六

最後に、『はにふの物語』の題名について考えてみる

ことにする。この題名は、若君が姫君への最初の艶書を、「一条ほり川へんの、はにふの小屋なる所より（五六五頁）」として贈ったことに起因している。この点について、真下美弥子氏は、

「はにふの小屋」とは、いうまでもなく草生いた貧しい小屋である。この語からまず想起されるのは、歌論書類にもしばしば引用される万葉歌

彼方の赤土の小屋に小雨降り床さへ濡れぬ身に
添へ我妹

であろう。男君を採って堀河辺に出たはした者の「あずまや」は、舟橋を渡る際にその連想から、「おやしきけぬに」ともつぶやいている。若い男女の恋の物語の基調となるにふさわしい歌であろう。これと共に忘れてはならないのは「平家物語」海道下および「太平記」俊基朝臣関東下向事に見える、

旅のそらはにふの小屋のいぶせさにふるさといかにこひしかるらん

の歌であろう。この歌は三位中将重衡、或いは日野俊基に対して、池田の宿の遊女が詠みかけたといわれる。敗れた貴人の哀感を象徴する「はにふの小屋」のイメージは、この物語にもそのまま受け継がれて行くのである。

と述べられている。事実、主人公の若君が、南朝方の近衛殿の子息であり、京へ出掛けてくる折には、堀河辺の乳母の家を住居としているので、哀感がこの物語に感じられる。しかし、やはり若君の艶書に「はにふの小屋なる所より」と記しているのは、「俊頼髓脳」や「奥儀抄」（どちらも第一句目は「久方の」となっている）等にも引用される「万葉集」（二六八三番歌）の歌が、強く反映されているように思われる。第二句目の「赤土の小屋に」だけでなく、第五句目の「身に添へ我妹」に着眼したい。姫君が、次々と、懸想人の艶書中の歌の典拠を解き明かして拒絶していく中で、この語句には「私に寄り添ってください。愛しい人よ」という求婚の意味を潜ませているように思われる。故に、この言葉が題名へと結び付いていったのではないだろうか。また、一般的に題名は、物語の主人公に関係する語、物語の主題を示す語、物語の機縁を示す語、物語の中心の和歌等が題名になることが多いようだ。本来、この物語の主人公は、申し子であり、石山寺の観音の化身である姫君である。故に、「貧しい小屋に仮寝する人の物語」と解釈すると、主眼が準主人公の若君となってしまうので、姫君を核において、「姫君への求婚物語」という意味で題名を理解するのが良いように思われる。したがってこの歌が、題名

や「はにふの小屋なるところより」の引歌として存在しているようである。

七

こうして考えてきた結果、刈谷本・尊経閣本「はにふの物語」は、本来、引歌が注記されていてよい個所に注記されていないかったり、或いは引歌として存疑の歌が注記されているようである。よって、原本「はにふの物語」には、原作者の引歌がもとと存在していたかどうかは定かではないけれども、物語が書写されていく過程で、引歌の注記が増えていったという点は想像することができらるであろう。また、両本には、共通の脱落がみられることから、これらの祖本とされる後土御門院勾当内侍筆本は、『はにふの物語』の原本とは考えにくく思われる。故に、後土御門院勾当内侍四辻春子を原作者とすることは難しく思われる。

注

(1) 「はにふの物語」に関する考研は、次の諸論がある。

①市古貞次氏「未刊中世小説解題」(楽浪書院

昭17)

②市古貞次氏「中世小説の研究」(東京大学出版会 昭30)

③市古貞次氏「艶書小説の考察」『国語と国文学 第十四巻第一号』(昭12)

④市古貞次氏校「未刊中世小説三」(古典文庫 昭26)

⑤阿部好臣氏「うたたねの草紙論」『国文学研究 資料館紀要』(昭57)

⑥菊地仁氏「説話・伝承と和泉式部」『国文学・ 解釈と教材の研究』35・12(平2)

⑦真下美弥子氏「はにふの物語」論『日本文学 の原風景』(三弥井書店 平4)

(2) 松本隆信氏「室町時代物語類現存本簡明目録」『御 伽草子の世界』(三省堂 昭57)を参照。

(3) 『国書総目録』による。実践女子大本・書陵部本・ 旧徳島光慶本・三谷栄一本『大納言物語』は未見。

(4) 「研究紀要人文科学2」(京都市立西京高校 昭27) による。なお、阿波国文庫蔵本『大納言物語』は、 多少用語の相違はあるものの、国会本『大納言物語』 とほぼ同じである。

(5) 横山重・松本隆信氏編「室町時代物語大成十」(角 川書店 昭57)に所収の刈谷本「はにふの物語」に

よる。

(6) 前田家尊経閣文庫蔵「はにふの物語」による。

(7) 国立国会図書館蔵「大納言物語」による。

(8) 歌の出典は注(16)の「古今和歌集」以外は「新編国歌大観」による。

(9) 注(1)の④による。

(10) 注(1)の④による。

(11) 片野達郎・松野陽一校注「新日本古典文学大系10 千載和歌集」(岩波書店 平5)による。

(12) 武藤禎夫氏・岡雅彦氏編「新日本大系第一巻」(東京堂出版 昭50)所収の「百物語」による。

(13) 注(1)の⑦による。

(14) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛氏校注・訳「日本古典文学全集12源氏物語」(小学館 昭55)による。

(15) 福井貞助氏校注・訳「伊勢物語」「日本古典文学全集8竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語」(小学館 昭55)による。

(16) 久曾神昇氏著「古今和歌集成立論全四巻」(風間書房 昭35)に所収の基俊本による。さらに、この書によると、「古今和歌集」では、後鳥羽院本が第四句目を「あなことくし」としており、元永本は「こと、し」、六条家本、寛親本、永治本、前田本、

天理本、寂恵本は「ふつうはあなことくし」といった注が付いている。また、歌論書の「俊頼髓脳」「和歌童蒙抄」「和歌色葉」「和歌肝要」「和歌大綱」「悦目抄」は、第四句目を「あなことくし」としている。

(17) 注(1)の⑦による。

(平成五年度大学院博士後期課程満期退学)